



月刊

2021

3
月号

みんぱく

特集

地域の記憶と 向き合う



東日本大震災から一〇年 日高真吾
被災した博物館資料を
守り、伝える 佐藤麻南
地域文化の保護と継承 星洋和
文化財レスキューを通して地域の
暮らしを見る 葉山茂



いわきの文化を伝え受け継ぐ

遠藤 諭

プロフィール
1976年福島県生まれ、福島県いわき市の無形民俗文化財「じゃんがら念仏踊り」の継承者。2018年に芸能で用いる道具を製作する事業を立ちあげ、地域の伝統を支える。東日本大震災直後から復興事業に携わり、現在は教育機関と連携しフアンリターとして児童育成にも力を入れている。その他、震災と地域文化をテーマに国内外で講演をおこなっている。

炎に包まれ、身ぐるみを剥がされた人びとが横たわる地獄絵図だった。目の前は白くかすみ異臭が漂った。死を身近に感じながらいく人もの遺体を救い上げ、手に残る感触が、もつと多くの人びとの避難を誘導することができなかったのかなどという後悔の念となり、日々自分を苦しめていった。

二〇二一年八月二四日。当時、人びとの悲しみが日々増すなかにおいて、祭事の自粛は当然視されていた。そうしたなか、瓦礫が散乱する地で「じゃんがら念仏踊り」を奉納し、亡くなった方々を弔った。この踊りは、新盆を迎えた家々を供養してまわるいわき市の郷土芸能である。そのとき、その場にたたずんでいた女性が近づいてきた。涙を流し「ありがとう」と声をかけてくれた。聞けば、私が救助した方のご家族であった。残念ながら、その方は入院生活のなかで亡くなられたそうだ。しかし、女性は、家族を助けてくれたこと、いま、こうして供養してくれていることにお礼が言いたいと声をかけてくれたのだ。最上の感謝の言葉との出会いであった。その瞬間、抱えていた思いが涙となり溢れた。あらためて人と人とを結びつける郷土芸能の本質を知った。私はいまままで、復興に向けた多くの協議や活動に携わってきたが、この出来事は、地域の文化を伝え受け継ぐこと、人との出会い

いやつなかりを大切にすることを強く意識するきっかけとなった。

現在、私は新たな地域社会を創出する試みとして、地元の小中学校で子どもたちに地域の文化を伝えながら、人間力を磨いてもらう活動に取り組んでいる。総合学習「未来の久之浜」もそのひとつだ。子どもたちは、目をキラキラさせて授業にのぞみ、地元産の産物やまちづくりについて調べ、グループで議論を重ねながら、未来の久之浜の姿を創造していく。一昨年、私が担当した子どもたちは、災害の記憶をどのように伝えていくのかを真剣に考えて『時をこえた「かぞく」物語』という紙芝居と絵本をつくった。震災を経た学びの時間が、いまではこの学校の授業として定着しつつある。

わたし自身もまた、子どもたちの描いた未来の久之浜を実現できるよう、誠心誠意、力を尽くしたいと思う。大人が本気で打ち込む姿に、子どもたちは憧れを抱く。その気持ちは彼らにとって、未来をつくる原動力にもなるだろう。郷土芸能に親しんできた子どもたちが演じ手に憧れ、その継承者となっていく過程にも重なる。時代が変わっても、人と人を結びつける力は変わらない。そう信じて、未来の地域社会や、新たなふるさとをつくりだす人材を育成する活動を継続していきたい。

月刊 みんなぱく

3月号目次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
いわきの文化を伝え受け継ぐ
遠藤 諭</p> <p>2 特集 地域の記憶と向き合う
東日本大震災から10年
——地域文化の継承を目指して
日高 真吾</p> <p>4 被災した博物館資料を守り、伝える
佐藤 麻南</p> <p>6 地域文化の保護と継承
——福島県双葉町のこれからを考えるために
星 洋和</p> <p>8 文化財レスキューを通して地域の暮らしを見る
——尾形家通信記録の整理から
葉山 茂</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド
イタリアの日本食ブームの背後にあるもの
宇田川 妙子</p> | <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界
木を編まぬモンゴル
——草原のバスケットリー文化のありか
島村 一平</p> <p>16 みんなぱく回遊
入口から出口まで
——研究者への変身
出口 正之</p> <p>18 シネ倶楽部 M
名門校か、公立校か？
教育の権利法が生んだ歪み
——「ヒンディー・メディアム」
岡田 恵美</p> <p>20 ことばの迷い道
『ガラン版 千一夜物語』翻訳裏話
西尾 哲夫</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|

地域の記憶と向き合う

東日本大震災から

一〇年

地域文化の継承を目指して

ひだかしんご
日高真吾
民俗人類学基礎論研究部

災害からの復興で注目される地域文化

未曾有の被害をもたらした東日本大震災から一〇年となる。わたしが最初に被災地に赴いたのは二〇一一年五月であった。文化財の保存について研究する保存科学が専門であるわたしは、被災した文化財の保全を支援する文化財レスキューの活動に参加していた。はじめて被災地に立ち、甚大な被害を眼前にしたとき、また人が住めるよう

になるのだろうかと不安にかられたことをよく覚えていいる。同時に、被災地全体が復興に向けて取り組む雰囲気にはまだまだなっていないと感じられた。

文化財レスキューの活動に取り組んでいたある日、岩手県で虎舞が再開したというニュースを目にした。漁の安全を祈願してはじまったとされる虎舞は、漁業の盛んな三陸沿岸部で広く親しま



宮城県石巻市での文化財レスキューの様子(撮影:石井里佳、2011年)



芸能の復興支援を住民と語り合ったメッセ(2016年)

れている郷土芸能だ。その後、多くの避難所で三陸沿岸部のさまざまな郷土芸能が再開し、それとともに復興に向けた気運が日に日に高まっていく様子を目の当たりにした。そこでは、郷土芸能が、人々を集め、語りの

地域文化自体が社会生活と密接に関連しているがゆえに、日常の生活のなかで住民に強く意識されるものではない。そこで、こうした課題を克服するために、地域博物館の役割に期待したい。地域博物館は、立地している地域の文化を調査し、収集し、保存し、活用し、継承する役割を担っている。しかしながら、住民の地域博物館への関心は必ずしも高くない。それは、自省も込めて述べるとすれば、地域博物館が社会教育施設であるがゆえに、地域文化を体現する当事者である住民に対して、「地域文化を教える」という姿勢で向き合う傾向にあったからではないだろうか。住民は当たり前知っていることをわざわざ博物館に教えられているよ

場を作り、前向きな雰囲気を生み出す、まさに復興の原動力となっていたのである。

わたしは、郷土芸能を地域文化のひとつとしてとらえている。地域文化とは、歴史や自然環境、人の往来によって生み出された社会生活の範囲で獲得された、有形・無形のモノや事柄の総体だ。だからこそ、被災地において、もとの社会生活を取り戻すため、あるいは新しい社会生活を生み出していくためには、地域文化がその原動力となるのではないかと考えるのである。

地域文化の継承を目指して

しかし、地域文化の継承はなかなか難しい。過疎化が進む地方では、地域文化を継承する世代の都市部への流出に歯止めがかからない。また、



城山虎舞の演舞(2017年)

うに感じ、関心が薄くなってしまったのかもしれない。だとするならば、博物館が、当事者である住民から教わる姿勢で向き合い、協力を得て、調査、収集、保存、活用、継承のために活動すれば、博物館への関心が高まり、地域文化を継承する拠点としての役割が果たせるのではないだろうか。と考える。今後、わたし自身も保存科学者として、博物館と地域住民が協働する活動に積極的にかかわっていきたいと思う。

ここまでは、わたし自身がこの一〇年、東日本大震災の被災地で、支援活動に携わるなかで感じたことを記してきた。本特集では、異なる立場、さまざまな視点で被災地と向き合っている研究者に寄稿いただいた。

その報告では、被災した博物館資料を継承し、再構築することの難しさや、帰りたくても帰れない住民がいるなかで、学芸員が自らの役割を問う現状が明らかにされている。また、過去に目を向けると、地元から離れることで、地域の再生に働きかける生き方があったことも浮かび上がってきた。いずれも、地域の記憶とどのように向き合い、継承していくのかを、深く考えさせられる内容だ。現在も、さまざまな人が、さまざまな思いを抱えて、東日本大震災の被災地と向き合っている。そのようななか、博物館はどのようにして地域の記憶を収集し、伝えていくことができるのだろうか。本特集をとおして、ともに考えていただければ幸いである。

本館では3月より、特別展「復興を支える地域の文化——3.11から10年」を開催する。東日本大震災から10年。復興に向けた懸命な作業が続けられるなか、被災地では日常生活を回復しつつあるかのようにも見える。暮らしを取り戻すとはどういうことか。被災地ではこの震災をどのように語り継いでいくのか。本特集では、被災地で地域の文化や博物館活動に携わる研究者のまなざしをとおして、地域の記憶とどのように向き合うのかを考える。

特別展
復興を支える地域の文化
——3.11から10年

会期 3月4日(木) — 5月18日(火)
場所 特別展示館

被災した博物館資料を守り、伝える

石巻市教育委員会複合文化施設開設準備室主事

佐藤 麻南

東日本大震災による被災の状況

宮城県石巻市南浜町にあった石巻文化センターは、北上川河口に位置していたことから東日本大震災で甚大な被害に遭い、建物は全壊の判定を受けた。目の前の川と海から押し寄せた津波が館内へ流れ込み、一階の天井まで浸水した。その結果、扉を改修したばかりの第一収蔵庫をのぞき、一階は壊滅的な被害を受けた。近くの製紙工場から流れ込んだ大量のバルブが、資料にもこびりついていた状態であったという。

石巻文化センターは、博物館と美術館機能を兼ね備えた施設で、市内出身の蒐集家、毛利総七郎氏が収集した総数一〇万点を超える毛利コレクションをはじめ、歴史・考古・美術・民俗資料を収蔵、展示していた。これらの資料は、文化財レスキュー事業によって救出され、多くの方々の支援のもと、現在も他機関で修復、保管されている。

現状と課題

昨年の夏、多賀城市にある東北歴史博物館でわる先輩方から「忙しくてなかなか資料整理の時間がとれない」と聞いていたが、それをまさに今、自分が実感している。限られた時間のなかでも、資料と向き合う時間は確保したい。その方法を日々、模索し続けている。

あらたな博物館の開館に向けて

先にも触れたが、現在、石巻文化センターの後継施設を建設中である。それは文化ホールと博物館機能を併せもつ複合文化施設で、ホール部

保管されていた、毛利コレクションをはじめとする歴史資料が数年ぶりに石巻市に戻ってきた。現在、これらの資料は、廃校になった小学校の校舎を改修した収蔵庫で一時的に保管している。この収蔵庫には空調設備がないため、温湿度の管理には苦戦している。毎日朝晩二回、全室のモニタリングをおこなっているものの、厳密な温湿度の管理は難しい。日々、資料の状態を観察し、異常があった際には東北歴史博物館の保存科学チームに相談しながら対処している。

一方で、彫刻や絵画を中心とした美術資料は現在も、国立西洋美術館等の他機関で修復、保管されている状態である。約一〇年ものあいだ、当市のためにご尽力いただいている関係者の皆様には本当に頭が下がる思いである。これらの美術資料は、現在、開館準備を進めている石巻市のあらたな博物館に今年の秋、収蔵される予定である。わたしは、二〇一九年に採用され二年目になるが、現在も他機関で保管されている資料が多数あるため、石巻文化センターが所有していた資料

分は二〇二二年四月一日、博物館はコンクリートの枯らし期間を経て二〇二二年秋に開館の予定である。

準備は大詰めを迎えているが、職員には入庁して数年の若手が多く、手探りで作業を進めることも多い。しかし、この一〇年間、多くの方々の協力を得て、あの未曾有の大災害から救い出された石巻市の文化財をその歴史とともに後世に残すことがわたしたちに与えられた使命である。石巻市のあらたな博物館を楽しみに待っていてくれ



廃校を利用した収蔵庫内での保管の様子(2020年)



廃校になった小学校を利用した収蔵施設外観(2020年)



2021年春に開館を控えた文化施設「マルホンまきあーとテラス(石巻市複合文化施設)」の外観(2021年1月31日)

の全貌を未だに見たことがない。また、台帳やカードなどの資料データも被災したため、ゼロから再構築する必要がある。本来であれば、すでに終わっておきたい作業であるが、震災から一〇年が経つ今に至っても、データの構築作業は続いている。これは当市にとって喫緊の課題となっている。資料の全貌を知る職員は定年を迎え、数名をのこすばかりとなった。彼らが退職する前に文化センター資料の再整理を終えておく必要があるが、日々の業務に追われ、資料整理にあてられる時間はわずかである。学生時代、文化財行政にかか

いる人たちのためにも、開館に向けて、今は最善を尽くしたい。

大変なことも多いが、石巻市に就職して二年、この間やってきたことが新しい博物館として、少しずつかたちになっていくことにやりがいを感じている。石巻市の復興のシンボルともいえる新しい文化施設の開館に立ち会えることの誇りを胸に、これからも頑張っていきたい。

地域文化の保護と継承

福島県双葉町のこれからの考えるために

星洋和
福島県双葉町副主任学芸員

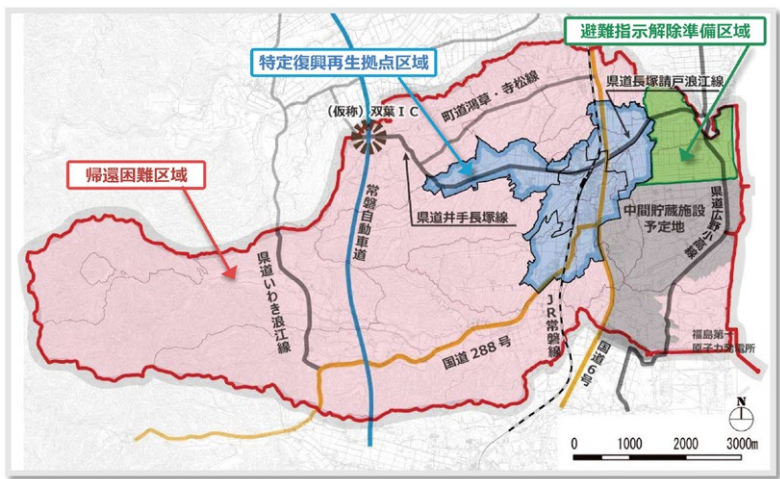
続く避難生活

双葉町は福島県の東側、浜通りとよばれる地域に位置する町である。

二〇一二年三月二日、双葉町を、震度六強の地震が襲った。いわゆる東北地方太平洋沖地震である。地震は各地に大きな被害をもたらし、また沿岸部においては津波被害を引き起こした。翌日には、双葉町の南東部に位置する福島第一原発において原子炉の爆発事故が発生した。これにより、当時七十四〇人いた双葉町的全町民は、町からの避難を強いられた。二〇二〇年一月三〇日時点でも、福島県内では四〇二五人、県外では二七八九人の町民が各地で避難生活を送っている（震災後の転出者、転入者等も含む）。

進む町の「復興」

原発事故から一〇年目の年に当たる二〇二〇年三月、双葉町の帰還困難区域に指定されていたJR双葉駅周辺の地区が特定復興再生拠点区域となり、立ち入り規制が緩和された。また、町の



「避難指示解除に関する考え方——避難指示解除に向けた諸条件とスケジュール整理（概要版）」1頁より（作成：双葉町、2018年12月）

町の将来を考えるために

双葉町は旧相馬中村藩の領内にあたり、重要無形民俗文化財である相馬野馬追を継承する自治体のひとつでもある。街道沿いの宿場町として栄えた歴史もあり、一月月上旬にはダルマ市とよばれる初市が催されていた（現在はいわき市にある復興公営住宅の敷地内で開催）。また、古代の遺跡や古墳が多く見つかっており、七世紀前半ごろにつくられたと考えられる清戸迫横穴は、国史跡に

北東部に位置する避難指示解除準備区域の避難指示も解除された（左頁の図参照）。

現在、双葉町は、県南部に位置するいわき市内に役場機能を置き、二〇二二年の春、帰還がスタートできるように、特定復興再生拠点区域内の再開発や、営農再開のための試験栽培などに取り組んでいる。また、避難指示が解除された区域には県の施設である東日本大震災・原子力災害伝承館や町の産業交流センターが設置され、その周辺では復興祈念公園および追悼施設の整備が進められている。

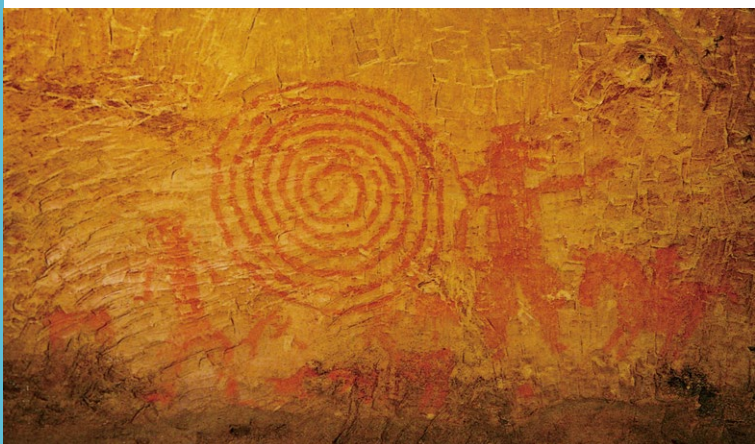
帰還をめぐる葛藤

震災から一〇年近い時間を経て、双葉町では生活を再開するための「復興」が加速度的に進められるようになった。しかし、町への帰還については、町民の多くは複雑な思いを抱えている。

この一〇年、町民は避難先であらたな生活基盤を築き上げてきた。町に帰還するということは、その築き上げた生活をやめて、もう一度あらたな

指定されている。

このような歴史をもつ双葉町には、町が収集したもののだけでなく、個人の家にも多くの文化財が残されている。震災後、町の学芸員は町内外の人びとの協力を得て、民家や双葉町歴史民俗資料館などでの文化財レスキューに取り組んできた。また、清戸迫横穴などの史跡の現状確認や、県指定天然記念物の維持と管理、町の各地区に伝わる民俗芸能の記録作成などをおこなってきた。そして、町全体で、震災の記録や記憶を残すために、津波被害や原発事故に関する資料の収集と



史跡・清戸迫横穴の壁画（提供：双葉町教育委員会、2009年）



いわき市内で開催されている双葉町ダルマ市（提供：双葉町教育委員会、2019年）



個人宅からレスキューされた文化財（提供：双葉町教育委員会、2020年）

保存、体験者の証言の記録などもおこなってきた。これらの活動によって残された文化資源は、町やその周辺地域の過去の姿を考えさせてくれ

る歴史的資料であると同時に、地域にかかわる人びとが生活のなかで生み出してきた財産でもある。復興を進めながら、これからの町の姿を考えなければならぬ我々にとって、町や地域の歴史、文化はそのヒントにもなるのではないかとわたしは考えている。

先に述べたように、多くの町民は帰還を巡って葛藤している状況にある。しかし、それは町民が町に対する想いをなくしてしまっているということではない。町の文化資源を基に、どのように町の復興を進めていくのか、どのような町なら戻りたいと思うのか、町民とともに考え、共有し、それを次代に継承していくことが、今後は重要になってくる。

町の復興はこれからも続いていく。震災から一〇年の月日が経つ今だからこそ、町や地域の歴史、文化がもつ価値について、議論を深めていく必要がある。

文化財レスキューを通して 地域の暮らしを見る

葉山茂
弘前大学准教授

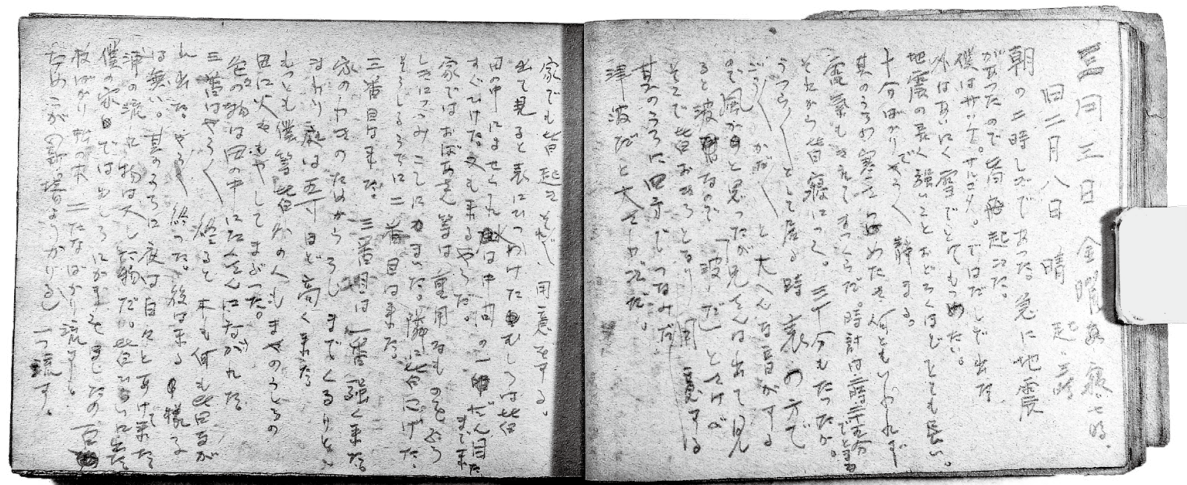
尾形家 通信記録の整理から

津波常習地の暮らしを見つめる

三陸地方は数十年に一度、周期的に津波が襲来する地域である。地理学者の山口弥一郎は、一九三三年の昭和三陸津波のあと、津波が来た土地に人びとが戻る理由を分析するなかで、この地域を「津波常習地」とよんだ。

二〇一一年の津波災害のあと、復興をめぐる工学的な見地から災害に遭いにくい地域づくりが検討されてきた。また民俗学や社会学の分野では在来知に注目して、災害をもたらす自然と人とのかわりを論じてきた。これらはレジリエンスの議論としてまとめることができる。

レジリエンスは復元力を意味することはである。このことばは被災地域が回復しやすくなる条件を探るなかで注目され、持続可能性の概念とともに、理念的な視点で災害地域の復興を論じるときに使われる。もつとも、理念的な視点は重要だが、地域の人びとが実際、津波常習地でのように生きてきたのかも改めて問う必要があるだろう。



尾形栄一氏が書き残した昭和三陸津波の日の日記(資料はいずれも尾形家所蔵)

小々汐の大本家、尾形家の通信記録

この問題を、宮城県気仙沼市小々汐の尾形家住宅に残された一九四五年までのがき資料から考えてみたい。尾形家住宅は二〇一一年当時、築二〇〇年の民家だった。この住宅は江戸時代中期以降、イワシ網漁の網元を営むことで発展した小々汐の大本家、尾形家のものである。

尾形家住宅は二〇一一年の津波で流され、わたしを含む、当時の国立歴史民俗博物館の職員が文化財レスキュー活動の一環としてこの住宅の生活資料の保全に携わった。救出した資料は二万点ほどあり、うち五〇〇〇点程度ががきだった。そのうち約二〇〇〇点が明治の終わりから一九四五年の終戦にかけて投函されたものである。この間には昭和三陸津波の年(一九三三年)も含まれており、津波の前後に尾形家の人びとがどのように動いたのかを知ることができる。

尾形家のはがき資料の特徴は、往復で残されている点で、半分は軍に入隊した家族が赴任先からも帰ったものだと考えられる。それらのはがきの多くに、小々汐の暮らしが詳しく書かれていた。

通信記録から家族の動きを読む

はがきの宛先、文面を分析すると家族の動きを読み取ることができる。昭和初期に暮らししていた一〇人の家族は、死去や軍隊への入隊、結婚を機に家を離れたことにより、終戦時には二人の女性が同居するだけになっていた。このことはいったい何を意味するのだろうか。

一九三三年の津波では小々汐でも被害が出た。当時の当主の弟、尾形栄一氏がその様子を日記に記している。津波のあと、尾形家の人びとはイワシ網漁を止め、災害後にさかんになったカキ養殖にも積極的に参加せず、海苔養殖のみを残して海の生業から遠ざかる。はがきを分析すると、尾形家の人びとが地元で営む漁業の代わりとして職業軍人を選んだように見える。

職業軍人は当時の社会において、身近な立身出世の手段であった。当時の当主は二〇歳で仙台に出て職業軍人となったあと、気仙沼の女性と結婚し妻子を連れて満州に赴任した。また、その弟二人もそれぞれ仙台、東京で陸軍の士官となった。

小々汐から届く便りに、入隊中の栄一氏は「カキも止めて好い事です。人手にばかり



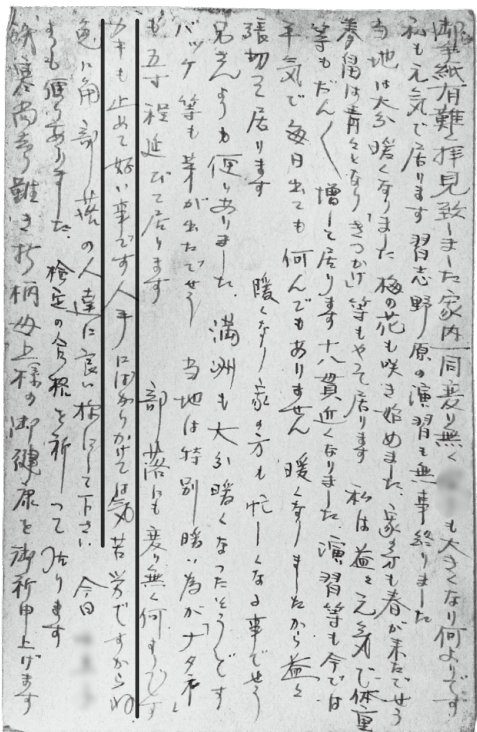
2011年3月の津波で被災した尾形家住宅

かけては気苦労ですからね。兎に角部落の人達に良い様にして下さい」と答えている。この記述からは、彼らが地元を離れることによって災害復興をめざしているようにさえ見える。

理念としての復興を越えて

このような状況のなかでも家に残った家族は、当主は家に戻ってくるものだと考えていた。一方、はがきの文面からは、災害をきっかけに尾形家の人びとがあらたな生き方を模索する姿が見える。それはレジリエンスが想定する地域への定着を前提とした生き方とは違った、地域を離れることもいとわれない生き方の模索である。

災害復興を考えると、我々は理念としての復興だけでなく、今一度、人の動きに基づく地域の姿を考える必要があるのかもしれない。



「カキも止めて好い事です」と書いた栄一氏のはがき(1940年3月6日、傍線は筆者による)

〇〇してみました世界のフィールド

イタリアの日本食ブームの背後にあるもの

うだ がわ たえ こ
宇田川 妙子
民博 超域フィールド科学研究部



ローマ、エウルにある「日本の散歩道」という名をもつ道の標識の下にて（撮影：モニカ・カスターレデリ、二〇〇九年）
日本食レストランに行ってみました

外国人のあいだで日本食が好まれるようになって久しい。欧米を含め、海外でも日本食レストランが展開し、日本食はもはや「珍味」ではなくなった。筆者が訪れたイタリアでも同様だ。日本食レストランに向かう人びとの心をつかんでいるのは何なのだろうか。

近年、イタリアで日本食が流行していることは、日本でも知られるようになってきている。ひとつには、「食」を総合テーマとした二〇二五年のミラノ万博で、日本館が多大人気を博したことが大きく報道されたためだろうが、その実態は想像と少々異なっているかもしれない。

若い世代のブーム
まず、イタリアの日本食は（少なくとも今は）外食に特化している。たしかに、健康的で自然な日本食というイメージはイタリアでも流布し、オーガニック食品を扱う店では豆腐やみそが売られている。しかし購入者の多くは菜食主義者や自然食品愛好家であり、それらが一般家庭の料理として食べられることはほとんどない。

また、流行しているといっても、二〇二二年の統計では、外国料理の飲食店のうちもっとも多いのは中国料理の三二・四パーセントであり、日本食はまだ六・六パーセントであった。もちろん現在はさらに増えているようだが、日本食の人気の数字以上に目立って見える理由は、それらがミラノやローマ等の都市に集中し、しかも若い世代を中心とするブームゆえと思われる。若者は総じて新しいものに敏感だが、今の世代はさらにアニメ等で日本の文化や情報に親しんでおり、日本の食にも興味関心が高い。

実際、イタリアで日本食ブームが始まったのは二〇〇〇年前後である。それ以前は日本人居住者や観光客向けの店だけだったが、このころをさかんにイタリア人を対象とする店が急に増えてきた。今では、寿司だけでなく鉄板焼き、焼き鳥、



日本食レストランのチラシの一部。メニューの表記を見ると、アルファベットによる日本語名が英語やイタリア語よりも大きく記載されている（ローマ、2017年）

丼物等、多様な料理が食べられるようになり、ラーメンやおにぎりの専門店もある。テイクアウトやデリバリーを積極的に導入しているところも多いが、いずれも利用者の年齢は他の外食産業に比べると圧倒的に低い。



最近、イタリアのスーパーなどで売られているカップ麺。ラーメンと焼きそばがある。かなり塩味がきいている（ローマ、2016年）

食べ放題の日本食

では、なぜ若者たちに日本食が広まったのか。たしかにアニメ等の影響はあるものの、実際の日本好きには意外とアニメ愛好家は多くない。これはわたし個人の印象であるだけでなく、二〇二二年にイタリアの日本食について調査をしたヴェネチア大学のある学生の卒業論文でも同様の結果が出ている。しかし、その一方で興味深いのは、日本食が「ピザ等の代わり」になっているという指摘である。じつは、日本食レストランの多くは定額料金で食べ放題というシステムをとっている。料金は他の外国料理のレストランと比較するとかなり安く、手軽にテイクアウトができる店も多い。

イタリアでは近年、若年層の失業率が非常に高く、仕事があってもその多くは非正規雇用のため、若年層の生活難が大きな社会問題のひとつになっている。そうした彼らに、日本食は経済的な意味でも支持されている。イタリアでは、夕食は友達と一緒にとることが少なくなく、その際、ピッツェリア代わりに日本食レストランに行くという選択肢が出てきたのである。

知識を楽しむ

とはいえ、口に合わなければ流行るわけはなく、とずるならば、日本の味は彼らに受け入れられたのだろうか。五年前、わたしはローマで、友人のイタリア人女性と、



彼女の甥で日本食好きの三十歳代男性と一緒に、日本食レストランで食事をしたことがある。そのとき彼が、日本人のわたしを前に気恥ずかしいと断りつつも、日本食が二度目のわたしの友人に対して、食べ方、食材、歴史等を嬉々として説明し続けていた姿が印象的だった。それ以来、注意して見ていると、日本食好きの若者たちのあいだでは、ニギリ、ホソマキ、ウラマキ、ドンブリ、カラアゲ等の日本語や日本食の知識が想像以上に浸透していることに気づき、そうした食の知識をめぐるとともに、彼らの日本食好きには大きくかわっているのではないかと思うようになった。もちろん彼らは、日本食はおいしいと言う。しかし、寿司ネタやトッピングが多様で、他と比べてもメニューの数が多く、それらが皿の上に美しく並べられて提供される日本食レストランで、彼らがそれらを前にうんちくを語り合ったり、カラフルな写真付きのメニューからあれこれ選んで注文したりしている様子からは、食を知識として楽しむ姿が浮かび上がってくるのである。

こうした食の楽しみと知識との関係は、食のセンスと知識を合わせもっているグルメという存在がすでにあるように、けっして新しい現象ではない。しかし近年は、インターネット等で食の情報を簡単に入手でき、誰もがいわばプチ・グルメになれるようになってきている。そしてイタリアでも、特にインターネットやSNSに長けた若者たちのあいだでこうした楽しみ方が広まり、そのあらわれのひとつとして日本食ブームがおこっているのかもしれない。いずれにせよ、イタリアで日本食が十分に受け入れられたのかを判断するにはまだ時間が必要だろう。



ローマの中心街にある日本食材の専門店。いわばマニア向けで、寿司や日本酒の他に、寿司や団子の手作りセットなども置かれていた（2017年）

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

特別展

「復興を支える地域の文化」

3.11から10年

会期 3月4日(木)～5月18日(火)
会場 特別展示館

関連イベント

研究公演

「阪神虎舞みんなく公演」

阪神虎舞による演舞とともに座談会を開催します。東日本大震災から10年の経過のなかで、東北と関西を結びつけた阪神虎舞結成の物語を紹介し、結書の記憶への向き合い方について考えたいと思います。
※オンライン(ライブ配信)で開催します(事前申込不要)。

日時 3月6日(土)13時20分～15時

出演 阪神虎舞

座談会

「芸能を移植する——阪神虎舞の試み」
パネリスト

橋本裕之(大阪市立大学都市研究プラザ)

特別研究員、坐摩神社権禰宣

中川眞(大阪市立大学都市研究プラザ
特任教授)

山本和馬(阪神虎舞)
金崎巨(大槌城山虎舞)
笹山政幸(被災文化遺産所在調査専門調査員)
コーディネーター 日高真吾(本館教授)
司会 寺村裕史(本館准教授)

みんなく映画会

「願いと揺らぎ」

東日本大震災の被災地となった宮城県南三陸町の波伝谷を舞台とした映画「願いと揺らぎ」をおして、住民をつなぐ地域文化の役割を考えます。

日時 4月10日(土)

12時45分～16時20分(12時15分開場)

会場 本館講堂

解説 我妻和樹(映画作家)

司会 日高真吾(本館教授)

【申込期間】

■友の会維持会員・正会員)電話先行受付

3月3日(水)～9日(火)

■一般受付

3月10日(水)～4月2日(金)

【明日に向かって曳け】

「石川県輪島市皆月山王祭の現在」

「明日に向かって曳け」を上映し、地域文化をどのように維持・継承していくのかという課題を参加者と共有するとともに、その解決手法を考えます。

日時 4月24日(土)

13時～16時30分(12時30分開場)

会場 本館講堂

解説 川村清志(国立歴史民俗博物館 准教授、本映画監督)

司会 日高真吾(本館教授)

【申込期間】

■友の会維持会員・正会員)電話先行受付

3月17日(水)～3月23日(火)

■一般受付

3月24日(水)～4月16日(金)

※要事前申込(先着順、定員160名)、参加無料(会場参加の方は要展示観覧券)
※オンライン(ライブ配信)でも参加いただけます(要事前申込、先着順、定員300名)。
※会場参加で予約の方は入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布します。

【申込方法】

本人を含む2名まで(会場参加のみ)。定員になり次第受付終了します。右記の該期間中にお申し込みください。

■友の会維持会員・正会員)電話先行受付(定員30名)

【申込先】千里文化財団友の会事務局
電話06-6877-18893

(9時～17時、土日祝を除く)

■一般受付

オンライン予約

みんなくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。

メール・電話予約(会場参加のみ)

【申込先】千里文化財団イベント予約受付

メール yoyaku-event@minpaku.ac.jp

電話06-6877-18893

(9時～17時、土日祝を除く)

※定員に満たない場合、11時から本館講堂前にて当日参加を受け付けます。

公開講演会

「グローバル化する武道と中東」

オリンピックイヤーである2021年。本講演会は、空手の中東への普及から、中東と日本をつなぐ人と文化の往来を描き出します。空手家の足跡と社会的背景から、武道のグローバルスポーツとしての展開について考えます。

日時 3月19日(金)18時30分～20時45分

(開場17時30分)

会場 オーバルホール

(大阪市北区梅田3-4-15 毎日新聞社ビルB1)

講演 相島葉月(本館准教授)

小倉孝保(毎日新聞社論説委員)

パネリスト
カッシーン
相島葉月
小倉孝保
アレキサンダー・ベネット(関西大学教授)
司会 河合洋尚(本館准教授)

主催

国立民族学博物館、毎日新聞社

※要事前申込、参加無料

※手話通訳あり

※オンライン(ライブ配信)でも参加いただけます。

※本館ホームページからお申し込みいただけます。

お問い合わせ先

研究協力課 研究協力係

06-6878-18209

本館展示場の一部閉鎖について

本館展示リニューアル音楽展示、言語展示、ビデオテークの一部のため、左記の期間、展示場の一部を閉鎖します。ご迷惑をおかけしますが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

閉鎖期間 3月24日(水)まで

みんなく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間直通送迎バスを特別展復興を支える地域の文化」の会期中に運行します。

※急遽予定を変更する場合があります。

※新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、座席数などが従来の運行と異なります。

くわしくはみんなくホームページをご覧ください。

※各イベントについてくわしくは、みんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

みんなくセミナー

※要事前申込(先着順、参加無料)展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です

※予約は本人を含む2名まで(会場参加のみ)。定員になり次第受付終了します。左記の該期間中にお申し込みください。

※オンライン(ライブ配信)でも参加いただけます(要事前申込、先着順)。

※会場参加で予約の方は入場整理券を当日11時から本館2階にて配付します。

第507回 3月20日(土)祝

13時30分～15時(13時開場)

【特別展「復興を支える地域の文化」3.11から10年「関連社鹿半島の民俗誌——復興キュレーション」

講師 加藤幸治(武蔵野美術大学 教授)

会場 本館セミナー室(定員100名)

※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内します。

【申込方法】

●一般受付

期間：3月18日(木)まで

オンライン予約(定員60名)

みんなくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。

●当日参加申込(定員20名)

11時から本館2階セミナー室前にて受け付けます。

※友の会電話先行受付は終了しました。

第508回

4月17日(土)

13時30分～15時(13時開場)

【特別展「復興を支える地域の文化」3.11から10年「関連双葉町に就職して——学芸員の視点から」

講師 星洋和(双葉町役場 教育総務課)

会場 本館講堂(定員160名)

双葉町の学芸員として働き始めて1年。双葉町における東日本大震災からの、あるいは福島第一原子力発電所の事故からの復興について、学芸員の視点からお話しします。

友の会

友の会講演会

友の会会員に限定して開催します(要事前申込、先着順)。受付フォームは友の会ホームページ内にあります。

※3月は午前中に開催します。

※3月はオンライン(ライブ配信)で開催します。

第510回 3月6日(土)10時30分～11時40分

【特別展「復興を支える地域の文化」3.11から10年「関連災害を後世に伝える——記録・供養・教訓」

講師 林勲男(本館教授)

大きな出来事は長く人びとの記憶に留まりますが、決して永遠のものではありません。災害を経験した人びとは、手記や絵図、石碑や写真などそれぞれの時代のさまざまな手段を用いて記録に残してきました。そこには出来事を後世に伝えるだけでなく、災害で亡くなった人を供養し、教訓を伝えることによって、将来の災害での被害や死者を少なくしたいという願いもうかがえます。今回は、津波常襲地域の「津波碑」についてお話します。

受付フォーム

https://www.senri-f.or.jp/510form/

第511回 4月3日(土)13時30分～14時40分

食を学問にする

講師 朝倉敏夫(本館 名誉教授)

SDG(持続可能な開発目標)の17の目標には食とつながる課題がいくつもあります。また、新型コロナウイルスの蔓延は食にかかわる産業や生活様式に大きな影響を与えました。これらを解決するには食を総合的に研究することが重要です。いまから半世紀前、石毛直道は「食は文化である」と提唱し、食の総合的研究をすすめました。いまではそれが、大学などでも学ばれる学問分野に成長しました。「食」を学問とする道の展開をみんなくを中心にたどりま。

【聴講方法】

①本館第5セミナー室にて聴講(定員40名)

※満席の場合は中継会場(定員17名)にご案内します。

②オンライン(ライブ配信)での聴講

受付フォーム

https://www.senri-f.or.jp/511form/

刊行物紹介

■出口正之、藤井秀樹 編著
『会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究』

清水弘文堂書房 3,850円(税込)

グローバル現象に対して全く正反対の方向性を有する人類学者と会計学者による、既存学問を变身させる(トランスフォーマティブ)研究。人類学者のフィールドワーク研究の成果から会計学の会計公準の変更を迫る。企業中心に社会を考える「ビジネスセントリズム」の蔓延を批判。



世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

バスケットリーがほぼない文化

国土の約八〇パーセントが草原だといわれる大草原の国、モンゴル。年間平均降水量が二〇〇〜三〇〇ミリメートル程度の大陸性のステップ気候なので、木が生えるにはあまりよろしくない環境である。もちろん北部にはシベリアに続く針葉樹林帯がある。またハンガイとよばれる森林ステップ帯では、シベリアアカラマツやシラカバ、ヤナギといった木も生えている。とはいえ木が貴重であることには変わりない。そんな国に木の枝や竹、草、藁などを編んで作るバスケットリーの文化はあるのだろうか。事実、バスケットリーとよべそうなものはほとんどない。

そんななかでもバスケットリーといえるものとして、牛糞を集めて入れるアラグとよばれるカゴが挙げられる。木が少なくて草原の遊牧民たちは乾燥した牛糞を拾い集め、それを燃料として煮炊きに使っている。乾いた牛糞はアルガルとよばれ、た

木を編まぬモンゴル

——草原のバスケットリー文化のありか

植物素材を編み組みするバスケットリー。世界にはバスケットリーがあまり見られない地域もあるが、そういった地域の事例からは、逆にバスケットリーの定義や、製作に必要な条件が明確になることがある。バスケットリーに通じる概念である「編み」の文化にも視野を広げ、バスケットリーとは何かを考える。

だの牛糞と区別される。

このアルガルは、乾燥すると軽く、燃やすと不思議なことになんともいえない芳香が漂う。アラグはヤナギの枝を編んで作られる。ヤナギは木がほとんどない草原でも川岸に自生しているのである。



牛糞を入れるカゴ、アラグ(中国、内モンゴル自治区フルンボイル盟[現フルンボイル市]、1999年)

もうひとつ挙げるとすれば、家畜用の囲いだ。家畜の囲いはそもそもオオカミから家畜群を守るため、あるいは防寒壁として築かれる。このような家畜の囲いは、ヤナギやシラカバなどもじり編みにして作られる。もじりの目に横棒とおすとできあがりである。



ヤナギで作った家畜の防寒用の囲い(モンゴル、ドルノド県、2000年)

いってよい。木より石の方が手に入りやすいからである。

バスケットリー風住居、ゲル

マイナス三〇〜五〇度に達する真冬の寒さから子ウシや子ヒツジを守るために、囲いに牛糞をペータとくつつけて防寒壁とする場合もある。この家畜の囲いは比較的森が近いところに居住する遊牧民たちのあいだで作られている。しかしゴビ砂漠や草原の遊牧民たちは木ではなく石で作ることが多い。モンゴル高原全体を見渡した場合、むしろこの石の囲い、つまり石垣の方が一般的だと

単純に「家」を意味することばである)は、木の骨組みにフェルトや布をかぶせたものである。遊牧民の男が三人ほどいれば、約一時間で組み立てたり、解体したりすることができる。

ゲルは、カゴのように木を組み合わせたハナとよばれる側壁で覆われている。ハナは折りたたみ式の格子である。これを四〜六枚、紐でつなげて円形にすると壁のできあがりである。ゲルの天井には、トーンとよばれる円形の天窗があり、そこから放射線状にオニとよばれる屋根木が八八本、カゴ状のハナに向かって伸びている。骨組みだけを見るならば、バスケットリーのように見える。しかしここで注意したいのは、ゲルはカゴのような構造をして

いるが、ハナという壁は木を編んで作られるものではないという点だ。木の交差部分には小さな穴が空けら



ゲルの格子状の壁ハナの接合部分。ラクダの革の留め具が見える(モンゴル、ドルノド県、2000年)

けるバスケットリー文化は、この抽象化された模様とゆるやかに繋がるものなのかもしれない。



天窗トーンに描かれた編み紐模様(モンゴル、ウランバートル市の市場にて、2018年)

編み紐模様の文化

木があまり生えないがゆえにバスケットリー文化に乏しいモンゴル。じつはその代わり、別の「編み文化」が発達している。紐である。遊牧民は家畜の毛を使ってさまざまな紐を作る。紐の編み方は多種多様だ。こうした紐編みは、彼らの抽象的なデザイン文化を生み出した。編み紐模様のことをモンゴル語ではヘー・オガルズという。そのなかでもウルズイー・ヘーは、安寧の象徴としてゲルの天窗やドア、箆(ナサ)などに描かれることが多い。

編み紐模様は非常に種類が多く、それだけで一冊の本になるくらいだ。木を編まぬモンゴルにお



ゲルを組み立てているところ(モンゴル、ドルノド県、2002年)

入口から出口まで——研究者への変身

民博 人類基礎理論研究部 出口 正之



財団法人によるパビリオン「生活産業館」(写真提供：大阪府)

会で非常に重要視されるようになってきた。例えば、今年三月から改正会社法が施行され、企業の役員には「外部の人」を任命することが義務化された。会社法の改正は、文化人類学者が意識しようとしまいと、文化人類学者が社会に与えた影響のひとつだとわたしは考えている。

余談が過ぎたが、イントロダクション展示こそ研究者の目線そのものを再現している。展示しているものは、確かに仮面、棺

「あれっ」と思った瞬間

いろいろな博物館を回ると、「知らない知識に出会い、勉強になった」と思うことがよくある。「勉強になった」というのはしっかりと記憶に刻まれやすく、あるいは今ではついSNSで書き込んだりするかもしれない。他方で、ほんの一瞬「あれっ」と思ったことは、その場では深く考えもしなかったのに、後からふっと気になることがなかったらうか。

文化人類学を修めたジャーナリストのジリアン・テットが『サイロ・エフェクト——高度専門化社会の罠』(文藝春秋、二〇一六年)のなかで強調したのが、このような「あれっ」と思う外部の目線、人類的な目線だった。

椅子といった民族文化を表象するようなものかもしれないが、そこには見る者とモノとの関係を問い直す姿勢がある。「外部者」である研究者、来館者は、異なる文化のなかにある「知らないモノ」と遭遇する。ここは「知らないモノ」と出会ったときの思考プロセスそのものを疑似体験してもらえらるコーナーだ。「似ている? それとも違う?」等々。ここはこのような目線に立つことができれば誰もが研究者に「変身」できる空間なのである。



仮面「ランダ」(インドネシア、H0090086)ほか

椅子(コートジボワール、H0237051)ほか

キリスト教の聖母祭壇(日本、H0275032)ほか

関帝誕のポスター(日本、H0269229)ほか

みんぱくの兄弟・姉妹

「国立民族学博物館」という名称は京都国立博物館や東京国立博物館とは漢字が五つも共通している。これらの国立博物館とみんぱくはとても近い関係のように感じられるかもしれないが、これらは文化庁の所管で、文部科学省所管のみんぱくとは、親族に譬(たと)えるならば「いとこ」ぐらいの関係になる。「兄弟・姉妹」関係ともいえるのは、所管が同じ国際日本文化研究センター、基礎生物学研究所、高エネルギー加速器研究機構の各施設、国立天文台などで、法律上は、「大学における学術研究の発展等に資するために設置される大学の共同利用の研究所」となっている。

もちろん、どの博物館も研究をおこなっているわけで、大きな違いはないようにも思うかもしれないが、設立の経緯が異なっているのだ。展示のここかしこにそのことはあらわれている。

入口

まず、入口。観覧券売場までの無料ゾーンは我々はイントロダクション展示とよんでいる。みんぱくは文化人類学を中心とした学問の推進を使命としている。多くの文化人類学者は、他の文化圏に入り込んで、内部の人たちとは異なる目線をもつ。

外部からの目線というのは、近年、実社

企業とは異なる民間非営利組織の研究をしているわたしの経験でいうと、例えば一九七〇年の大阪万博の公式記録には、国、州、都市、政庁、国際機関、企業がパビリオンを出したと書いてある。政庁とは、香港のことを指していた。ロサンゼルスは都市とされ、香港は政庁とされており、主催者は両都市を「違うもの」として見ていたわけだ。他方で、大阪万博には少なくとも民間非営利組織がパビリオンを出していたところが、主催者にはこれらが企業と「同じもの」として目に映っていた。わたしが「あれっ」と思う瞬間である。

そして出口

みんぱくの展示の出口は日本の文化展示になっている。そしてそのなかの最後の最後がいわゆる「日本らしいもの」がないばかりか、それまでの他の地域の展示ともよく似ている「多みんぞくニホン」のコーナーだ。出口を出るときに、展示を見て「勉強になった」ことだけを思い出すのではなく、何となく「あれっ」と違和感を覚えたことを振り返ってほしい。そして、ぜひ「あれっ」と思ったことを文字化してみてほしい。それこそがみんぱくが「いとこたち」の博物館と異なる法律に基づく機関であることの証でもあるのだから。



「ヒンディー・ミディアム」

原題：Hindi Medium

2017年/インド/ヒンディー語/132分/DVDあり

監督：サケート・チョードリー

出演：イルファーン・カーン、サバー・カマルほか



小学校受験に奔走するラージー家
(提供：フィルムランド)

名門校か、公立校か？
教育の権利法が生んだ歪み

インドの首都デリーを舞台に、名門小学校への「お受験」に奔走する夫婦をコミカルに描いた本作は、話題性や興行的成功において二〇一七年を代表するインド映画となった。夫役を演じた主演の国際派俳優イルファーン・カーンは惜しくも二〇二〇年に五三歳で他界したが、パキスタン女優サバー・カマルとの軽快で息の合った演技が本作では光っている。

イングリッシュ・ミディアムとヒンディー・ミディアム
今日、国際的な巨大企業の経営責任者がインド出身者であることはめずらしくない。インドでは、欧米の高等教育機関への進学率が高く、また世界で活躍するIT技術者も多数輩出しているが、その背景には、初等教育から一貫して英語を教授言語とする「イングリッシュ・ミディアム・スクール」の存在がある。他方、一九八六年の国家教育政策決議によって地方分権化が進み、各州では独自の教育制度が整えられ、教授言語にも各州の公用語が使用されている。デリーの場合であれば、ヒンディー語を教授言語とする「ヒンディー・ミディアム・スクール」がある。作品内では、前者が私立名門校、後者が公立校（政府系の学校）として象徴的に描かれている。妻ミータは幼少からの英語教育がその後の社会階層を決定すると頑なに信じ、「公立

校で何が学べる？ 人と話せなくなる。英語恐怖症になる」と言っ、夫ラージの反対を押し切り、愛娘ピアの名門小学校受験を決意する。

作品で描かれる二つの社会階層

ラージ夫婦はともにオールドデリーの下町で育ち、ラージはそこで小さな仕立屋から、婚礼衣装などを販売する会社の社長へと二代で財を築き、下町では暮られる存在であった。しかし、ミータは娘の将来を心配するあまり、名門校に近い南デリーの高級住宅街への引越しを強行する。下町・公立校出身の新興富裕層である夫婦は、富裕層のコミュニティに適応しようと奮闘するが、親子ともにも上手くいかない。また名門校受験の塾を紹介され、夫婦はそこで何度も保



低所得者を装うラージ (提供：フィルムランド)

護者を対象とした模擬面接を重ねるが、そのかいもなく受験結果は不合格が続き、可能性は残り一校となる。そんなおり、ラージの会社の従業員が社会的弱者を対象としたRTE枠（詳細は後述）を利用して名門校に息子を合格させた事実を知り、夫婦は破産した貧困者を装って、低所得層地区へと再び引越しをする。経済的・物質的な貧しさに直面し戸惑いながらも、一家は隣人のシャーム一家の助力をえて、最後の一校を受験する準備を進めていく。シャーム一家も

RTE枠で息子を名門校に入学させることを夢見ていたが、ラージ一家のために親身になって何度も助け船を出してくれた。

だが名門校の抽選で入学許可をえたのはピアだけであった。高級住宅地に戻った夫婦は、不正でえた入学資格や本来享受されるべき人の権利を奪ったことに対する罪悪感に苛まれ、匿名での寄付を目的にシャームの息子が通う公立校を訪問する。そこで、才能に溢れ生き生きとした子どもたちの姿を目の当たりにし、教育とは何か、我が子に胸を張れる親の姿とはどういうものか、真摯に見つめ直す。

RTE法に見る光と陰

本作が話題を集めた要因は、現在のインド社会における教育問題への関心の高さといっても過言ではない。インドでは一九九〇年代の経済自由化政策以降、ラージ

のような新興富裕層や中間層の台頭によって内需が拡大し、経済が活性化したが、それは各世帯の教育に対する意識にも影響をおよぼし、教育費を増加させた。

作品に登場するRTE枠とは

は、二〇一〇年に施行された「無償義務教育に関する子どもの権利法（RTE法）」の第二条に基づく制度である。すなわち、以前は富裕層が独占してきた、国や州の補助金を受けない認可私立校であっても、入学定員の少なくとも二五パーセントは、近隣の社会的弱者層から無償入学させるとされた。本来は、すべての子どもたちに義務教育の権利をという大義で制定された法制度であるが、RTE枠をめぐる不正が横行し、初等教育現場に混乱を招いているという事実は否めない。そして何よりも公立校の機能不全の問題に対して、中央政府や州政府がどのように対策を講じてゆかが本質的な課題である。本作は名門校至上主義や公立校に対する偏見に警鐘を鳴らすという意味において、問題提起の役割を担っているといえる。



ラージー家とシャーム一家 (提供：フィルムランド)

岡田 恵美

民博 人類基礎理論研究部

ことばの迷い道

『ガラン版 千一夜物語』 翻訳裏話

にし お てつ お
西尾 哲夫

民博 グローバル現象研究部

「山のあなたの空遠く／『幸』住むと人のいふ。」とはカール・ブッセ（上田敏訳）の有名な詩だが、はるかかなたの地には善きものがすむと同じく、悪しきものもすむと思うのが人の世のならいだ。

最古の起源は古代イランのササン朝ペルシアまで遡れるかもしれないが、まとまった物語としては一五世紀ごろの手稿本が今に伝わる『千一夜物語（アラビアンナイト）』がある。それを一八世紀初頭にアントワーン・ガランがフランス語に翻訳して、今では誰もが知る世界文学になった。わたしはこれを現代の日本人が楽しめるように読みやすい日本語に翻訳した。一五世紀のアラビア語手稿本、一八世紀初頭のガランのフランス語訳初版を比較し、それぞれの時代の価値観や世界観を塩梅しながら訳出を進めた。たとえば、単純な作業と思われるかもしれないが、中世の口語まじりのアラビア語、宮廷風のもつてまわったことば遣いのフランス語を読むだけでも至難のわざだ。加えて、中世アラブ世界近世ヨーロッパ世界、現代日本という時代と地域を超越した三つの世界に暮らす人びとの心性を加味しながら訳語を決めるのが大変だった。

民族集団の呼称は特にやっかいである。一例をあげよう。アラビア語のマジユースということばはフランス語ではマジギ (Magie) と訳されている。現代フランス語の辞書には、拝火教徒、ゾロアスター教徒、マジ、魔術師などのことばがならぶ。新約聖書でおなじみの「東方の三博士」もギリシア語のマゴイ、ラテン語のマジナのだ。『千一夜物語』では基本的にイスラームに敵対する人

びととして登場する。なかには人身御供にされるムスリムの王子を助ける女性のマジユースもあり、多くはイスラームに改宗して幸せに暮らす。訳出にあたり、マジユースを「拝火教（徒）」とした。また文脈によってはマジユースとそのまにまにした。現代世界ではイラン・イラク戦争時の言説に見られるように、マジユース批判がイランの伝統文化を象徴するものとして間接的にはシリア派批判とつながるからだ。

ゾロアスター教（拝火教）は古代イランで興り、イスラームではキリスト教やユダヤ教と同じく「啓典の民」とされたが、アラブ征服後にはシリア派への改宗が進んだ。千一夜では、初期のゾロアスター教徒はイスラームに導くべき偶像崇拜者として描かれたが、やがてムスリムを人身御供にする悪逆の徒となる。後期の編集では、この傾向がさらに顕著になる。このような変化の要因としては、現実のゾロアスター教徒との関係性が希薄になり、物語設定のなかでは自己対峙する他者としての一般的な役割しか与えられなくなったことがあるだろう。

アラビアンナイトでは、イスラーム世界と異世界との中間にある境域世界で不思議な出来事が起こる設定になっており、中国や東南アジアがそのような物語空間となる。その意味では、中東イスラーム世界におけるムスリムを犠牲にするマジユースという設定は、ヨーロッパ・キリスト教世界におけるキリスト教徒を犠牲にするユダヤ教徒という設定と、歴史心性においてバレルなのかもしれない。

編集後記

3月に始まる特別展「復興を支える地域の文化——3.11から10年」に合わせ、特集「地域の記憶と向き合う」を組んだ。展示のイメージカラーである三陸の海の瑠璃色のように、内容は濃く深い。双葉町の人びとの帰還をめぐる葛藤は背筋を正して読まずにはいられない。石巻における「資料の全貌を知る職員は定年を迎え、数名をのこすばかり」という件には10年の歳月と苦闘が凝縮されている。他方、故郷を離れて暮らす身には、気仙沼の網元が1933年の津波後、地元を離れることで災害復興をめざしたようだという指摘に救われる。返礼品ばかりが話題となる「ふるさと納税」も、本来は外から地域を支えるしくみだった。関連イベントも盛りだくさんの特別展である。是非おこしいただきたい。

本誌編集を進めていた2月13日（土）、福島県沖を震源地とする大規模な地震が発生した。被害にあわれた方にお見舞い申し上げます。（南真木人）

- 表紙 右上：城山虎舞の演舞（撮影：日高真吾、2017年）
 右下：尾形家住宅のまわりで生活資料を集める（撮影：葉山茂、2011年）
 左上：石巻市の廃校を利用した収蔵庫（撮影：佐藤麻南、2020年）
 左下：いわき市内で開催されている双葉町タルマ市
 （提供：双葉町教育委員会、2019年）

2021年2月号インフォメーションページの内容に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

P12 研究公演「阪神虎舞みんぱく公演」でおこなう座談会のパネリスト2名の氏名、肩書きを下記のとおり訂正いたします。

- 誤）・中川真（大阪市立大学都市研究プラザ 特任教授）
 ・金崎亘（城山虎舞保存会）
 正）・中川真（大阪市立大学都市研究プラザ 特任教授）
 ・金崎亘（大槌城山虎舞）

次号の予告

特集

「コロナが変えた日々を追う」（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できるみんぱくフリーパスや、学校・学部単位で利用できるキャンパスメンバーズなど各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
 （電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00）



月刊みんぱく 2021年3月号

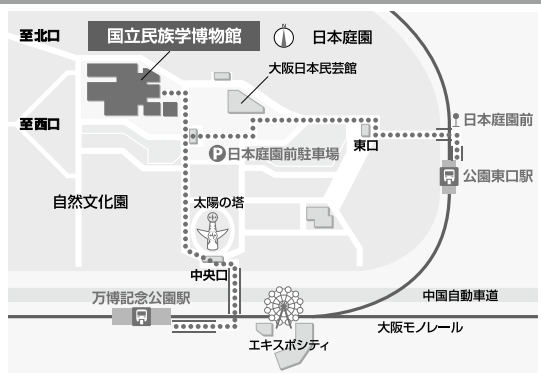
第45巻第3号通巻第522号 2021年3月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
 電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
 編集委員 南真木人（編集長） 上羽陽子 齋藤晃
 菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾

デザイン 宮谷一孝 長岡綾子
 制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
 印刷 株式会社 遊文舎

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
 *本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

みんぱくフェイスブック
 みんぱくツイッター
 みんぱくインスタグラム
 みんぱくYouTube

<https://www.minpaku.ac.jp/>

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>



みんなのほくぶつかん みんぱく

MINPAKU

特別展 | 復興を支える地域の文化 —3.11から10年

2011年の東日本大震災では、復興の原動力としての「地域文化」に大きな注目が寄せられました。本展示では東日本大震災から10年が経つ今、災害からの復興を支える地域文化をめぐる活動について、あらためて振り返ります。また、豊かな社会の礎となる地域文化の大切さとその継承について考えていきます。

展示構成

プロローグ 津波の記憶

第1章 復興を後押しする地域文化の可能性—郷土芸能の持つ力

第2章 地域文化を再生する

第3章 災害を契機とした地域文化の再発見

第4章 災害に備えて

エピローグ 地域文化の継承—人と人をつなぐもの

◆会期：2021年3月4日(木)～5月18日(火)

◆会場：国立民族学博物館 特別展示館



地域の復興を後押しする郷土芸能、鶴鳥神楽

特別展図録

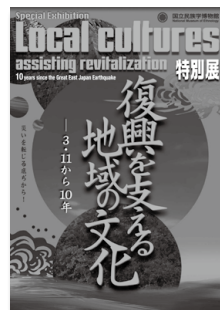
復興を支える 地域の文化 —3.11から10年

編者 日高真吾

発行 国立民族学博物館

176頁、A4判

価格1,800円(+税)



関連書籍



災害と文化財

—ある文化財科学者の視点から

日高真吾 著

248頁、A5判

価格1,800円(+税)



記憶をつなぐ

—津波災害と文化遺産

日高真吾 編

186頁、A5判

価格1,500円(+税)